AI診断 令和で身近に

広島大病院の木内良明院長に聞く

令和時代に医療はどう変わるだろうか。広島大病院（広島市南区）の木内良明院長(60)に展望を聞いた。（衣川圭）

―令和時代に医療の分野ではどんな進歩が期待されますか。

人工知能（AI）を使った診断の技術が大きく進化するでしょう。がんの画像診断にも、これまで以上にAIが使われるようになります。広島大病院の医師が開発に取り組んできたのが、弱い放射線でも機械が補正してクリアなコンピューター断層撮影（CT）画像を得る技術です。患者の被曝線量が減る利点があります。AIを使うと、腫瘍などの見落としも減るでしょう。

眼底写真1枚から、年齢や性別から、血圧や血糖値までをAIが読み取る技術があります。AIを活用すれば、新薬開発のペースも速くなると考えられます。ただ、AIは診断の道具の一つです。最終判断は医師でなければならないと思っています。

きうち・よしあき　58年、徳島市生まれ。83年、広島大医学部卒。06年、広島大大学院教授。専門は眼科学。広島大病院副院長などを歴任し、18年4月から現職。

再生・ゲノム医療進む

―再生医療もこれまで以上に進みそうです。

人の細胞から作製できるiPS細胞は、パーキンソン病や心不全、脊髄損傷、目の角膜の病気などの治療のための臨床研究が進んでいます。広島大では足の血管や、軟骨の再生に取り組んでいます。ただ、細胞を加工する施設の維持に、膨大な費用がかかるなどの課題があります。

がんゲノム医療もすごい勢いで進むでしょう。患者さんの遺伝子を早い段階で調べて「この治療法がいい」とか「この薬が効きそう」という、オーダーメードの医療に向かっていきそうです。今は「金食い虫」とも言われているロボット手術も、競合メーカーが出てくるとさらに発展します。

令和の時代には、今まで治らなかった病気が治るようになる確率は高まるでしょう。ただ、新しい技術に過度に期待し過ぎるのもいけません。うまくいかなかったときに、原因を突き詰めていく地道な研究も大切なんです。

生活改善サポート充実

―平成時代に生活習慣病が増えました。克服できますか。

そこは、患者さんの意識改革しかありません。症状がなくても定期的に健康診断を受けて、自分で生活習慣の改善にやる気を出してもらいたい。眼科で診療していると、糖尿病網膜症や緑内障があると伝えても、なかなか治療されなくて、本当に悪くなってから来院される人をよく見掛けます。生活改善をサポートするための仕組みはどんどん出てきますので、うまく活用してもらいたい。

―病院はどう変わりますか。

どんな商品でもそろうデパートのように、どんな病気も扱う大きな総合病院がいくつも存在します。医師の数も限られる今後は、病院ごとで役割を分担していく時代になります。それには、患者さんの情報を共有できる仕組みが不可欠です。病院が連携して治療成績を集約して分析し、よりよい治療法を探る営みも大切になります。

中国新聞の許諾を得ています

掲載日時　2019年5月1日